

日文研究室だより

二〇〇八年度

会長 彦坂佳宣

日本文学専攻の近況をお伝えします。

まず、今年度から、任期制講師に福井辰彦先生、助教に村田裕和先生をお迎えしました。福井先生は京大から来られ、近世・近代の交わる時期の日本漢文がご専門と聞いております。といつても国語国文畑のご出身で、戯作物の漢文翻案の模様を伺ったことがあります。村田先生は立命館出身で近代文学を思想史、美学・美術史の関連をとおして研究しているとのこと。各種メディアの大衆化がもたらした変化についての話を伺いました。

これらの領域と内容は、ご二人の採用時の模擬授業を拝見してのものです。最近の採用条件には、研究レベルだけでなく教育力なども問われる時代になりました。と言つても、まだこうした模擬授業は、他の場合をふくめて教員側の説明主導であることには変わりありません。

さて、日文的教員構成は、他大学に比べて幅広い分野と研究方法をと

ることに特色があると思います。ご二人を加えたことでこの傾向がさらに強まりました。古典の研究も、院生を含めテキスト中心であることに変わりはないものの、他の媒体・視点を交えたものが増えってきました。近年の修士論文では、絵に添えられた和歌を一体として研究するもの、風俗史的な変遷を追うもの、文学活動における面を政治史的な視点で説くものなども出てきました。とは言え、文献学的な基礎の上にこうした分野を加えていくことの重要性は、専攻会議その他の話し合いの中で、随時、確認されていると認識しております。

もう一つ、専攻ないし日本文学会にとつての変化は、〇九年度から学部学生にも学会員になってもらい、勉学・研究活動を活性化し、また学会活動の広がりや会計の健全化をはかることになったことです。これには専攻教員の話し合いがあり、その上でクラスに二回の説明、クラス代表とやはり二回の話し合いを持ちました。

近年は学生の研究室離れが進み、共同研究室も空きが目立ちます。他

に心地よい場所があったり、勉強から離れがちな生活になったことが要因でしょう。学部学生の活動も一部の学生層を除き低調になってきました。学部学生の会員化は、こうした傾向に歯止めを掛けようとするものです。教員全体がこの点を確認し、日常の授業をとおして進めていく必要があるでしょう。幸いにも、院生主体の談話会(研究例会)は以前に比べてやや活発になって来ました。院生の増加、また非常勤をふくめた教員側の参加もあることが要因だと思います。

最後に学部と日文専攻との関係にふれます。まず、〇九年度からは、総合プログラムの改組による京都学プログラム、言語・コミュニケーションプログラムの2つが発足します。日文教員もそこに移籍や兼任になる者がいます。さらに現在、学部改革の方向が模索され、その案の中で従来の日文専攻の教員組織と専門内容をどうするか議論があります。成案が出るにはまだ時間が掛かりますが、研究の内容と方向性が問われていることになりました。

(二〇〇九年三月末日)